

暑い！

志村 良知

暑い。

朝の天気予報の日本列島地図が真っ赤を通り越して赤紫になっている。『炎天』を季語に一句と風流心で外に出たが、命の危険を感じて早々に逃げ帰った。

ヨーロッパも暑いらしい。ロンドン、パリ、マドリッド、リスボンなどが軒並み四〇度越えだという。もっとも以前のヨーロッパも暑いときは暑かった。私が経験した屋外で最も高い気温は二五年ほど前、七月末のマドリッドでの四五度だ。これはあの宮殿風の中央郵便局前の街頭温度計の示度で、公式なものではない、しかし温度計は日陰に設置してあったのでその時の公式気温と大差ないであろう。翌日のミーティングは「昨日は暑かったなあ、マドリッドで〇〇人ほど死んだらしい」というような会話で始まった。しかもその部屋にはエアコンがなく、PETボトルの水も生ぬるいだった。帰路、乗り換えのジュネーブ空港で歩かされた炎天下のエプロンは、経験した最も暑いスイスだった。

当時のヨーロッパでは、エアコンは都会の大ホテルにはあったものの、オフィスやレストラン、タクシーには無いことが多く、暑いと逃げる場所がなかった。カフェの水やビールも生ぬるく、氷は貴重品だった。一般家庭には勿論無し、ヨーロッパ人は窓を開けるのが嫌いなので、締め切った室内で熱中症になっていた。

さらに昔のヨーロッパは暑くなかったかということとそんなことは無いと思う。日本で四〇度を超える時の定番、フェーン現象はアルプス北斜面に吹く南の熱風名から来ている。ヴィヴアルディの『四季』、夏の第二楽章は、ただぐつたりの北イタリアの暑さのさまを表現して妙である。

今年の全地球的な暑さは、強いラニーニャ現象（西向き赤道貿易風が非常に強い）で偏西風が大きく蛇行し、赤道直下の熱風が高緯度まで吹き込んできているからだという。

私の愛するスイスの氷河の溶融後退も尋常ではないらしい。あの風景が変わり、若い人たちが氷河を見られなくなったりしたら悲しい。